



利用者、点訳者としてみた日野市立図書館の50年

点訳グループ
六点の会代表
久保田 正子さん



この街に図書館があったらと切望していた私は開館当時の喜びを今も思い出します。

私が日野に転居してきたのは55年前、多摩平の丘陵にできた大きな団地。高台に建つ家のベランダから見える多摩丘陵の緑と、のどかな田園風景は新鮮でした。

だがここでの生活にも馴れてふと気付いたのは、この町には図書館がない。都心から越してきた私は、図書館はどの地域にでもあるものと思っていたのです。団地の若い住民の大半は子育ての真最中で、子どもには本を読んで上げたくても絵本は簡単に手に入らない時代です。そこで私はお互いに誘い合って自分の家にある本を持ち寄って貸し借りをすることを提案し、「こども文庫」を作りました。

それから3年後、「ぼくの伯父さん」の軽快な音楽を流しながら移動図書館「ひまわり号」が廻り始めました。子どもから大人までが楽しめる図書を積んで。

図書館という建物ではなく、小さなバスが本を積んで来てくれる、なんてユニークな発想でしょう。「ひまわり号」を待つ間や、本を借りた後でも住民同士の会話は弾み、素朴で暖かな風景が見られました。

その後、都電を利用した「電車図書館」ができ、次いで「多摩平児童図書館」が開館、子どもたちはそこで自由に本に親しみ読書の楽しさを身につけていきました。

私が図書館と関係を持つようになったのは点字を通してです。日野には「光の家」という視覚障害者の施設がありますが、自立している障害者を支える点訳者が一人もいなかったのです。そこで当時から点訳をしていた私は、自宅で自主講座を開き、点訳指導を始めました。そして、完成した点訳書を図書館に寄贈し、図書館から点字利用者に貸し出してくれるよう話し合いを始めました。

だが当時はどこの公共図書館でも点訳書は扱わず、点字利用者は「点字図書館」から借りるという住み分けが常識だったのです。

話し合いから5年後、図書館は点訳書の貸し出しを始めました。公共図書館では初めてのケースです。それから30有余年、「点訳グループ六点の会」として図書館と活動を共にしてきました。

私自身も図書館との関わりの中で、図書館の本来の目的や役割、そして将来に向けての方向性などを学ぶことができました。私の願っていた「目の見える人も見えない人も、共に利用できる図書館」が、ここ日野の街にあることを誇りとして、これからも更に発展していくことを心から願っています。



青少年からのメッセージ

佐藤 玲菜さん



私は図書館が大好きです。だから、日野市に図書館ができて今年で50年ということで、とても嬉しく思っています。

私が図書館という場所を知ったのは小学校の3年生のときです。しかし、そのときはあまり図書館という場所を意識していませんでした。“図書館は調べ物をするための場所”このように思っていたのです。

しかし、それから5年以上がたち、今では図書館はただ調べ物をするだけでなく、もっと他にもいろいろすることのできる場所であるとわかりました。本を借りたり読んだり調べたりするのはもちろん、たくさんの中まだ読んだことのない新しい本を、見つけることのできる、出会える場所。それが図書館だと思います。

私は将来、図書館の館長さんになるのが夢です。そして、日野市に図書館ができて50年の今より、何年か後の私のときに、このように本をたくさん読んでくれる人がもっともっと増えればいいと思います。今はインターネットが普及し、本をアプリでたくさん読むことができるようになりました。しかし、確かに軽くて便利だとは思うけれど、できれば紙の本を読んで、1頁1頁を大切に楽しんで読んでほしいと思っています。

(高校生)

佐藤 恭子さん



日野市立図書館が開館50年を迎えたことを心よりお祝い申し上げます。

私にとってとても身近な図書館が実は50年という長い歴史を歩んできたということに改めて驚かされます。

私は小さなころから図書館に行くことが、日常の一部となっていました。その経験の中で、私は市民にとって図書館とはなくてはならないものだと確信するようになりました。なぜなら司書の方が世の中にある膨大な数の本の中からすばらしい本を選んでくれるからです。図書館の提供する本の多くは、私たちにさまざまなことを教えてくれるように思います。私はたとえ実用書であれ、小説であれ、すばらしい本はその人の人生に影響を与えると考えます。私自身、知りたいことや分からぬことがある時、いつも図書館に良い本を紹介していただきました。

そのため私は普段図書館を利用しない方に図書館や本の魅力を伝えたいと思い、「ヤングスタッフ」などの活動に参加しました。図書館をより盛り上げるために、このような活動に関わるのは光栄ですし、何より楽しかったです。私にとってかけがえのない日野市立図書館がこれからも発展していくことを願っております。



「日野の図書館」だからできしたこと、できること

井上 博司さん



「長くつ下のピッピが溶けちゃった！」小学生だった姉が悲鳴を上げました。「ひまわり号」から借りてきたピッピ。何でかストーブの上に置きざりにされ、そのまま熱せられ、カバーがグチャグチャに。母親と届けた新品のピッピに恐縮したのは、むしろ受付の人。この出来事は図書館が近く、特別な場所になるきっかけになりました。その姉も今年、還暦。数えてみれば「ピッピ事件」の時はまだ、日野に図書館ができる間もなかったことになります。

今では「うるさいとか耳障り」と言われ、聴くことはなくなりましたが、まちで「ぼくの伯父さん」のメロディーが流れてくると、「ひまわり号」だとワクワク。そんな日野ではあたり前だったことが、日本で「特別な存在」だったのを知るのは、それからずっと後のことでした。

そのころはポケットがついた「図書貸出券」—ブラウン式貸出券というのだそうです—を一人に4枚4冊分。貸出期限は2週間だったような。返却しなければ、借りられない仕組みでしたから、せっせと通わなければいけませんでした。

しばらくしてカード式になった時はビックリ、さらに貸出数に制限がなくなったのを聞いて隔世の感。便利というより、「大丈夫かしらん」と思ったことを覚えています。

さらには、インターネットの普及で家に居ながら、本の予約までできるようになり、聞いたところによると、話題本には予約が殺到するのだそうです。貸出の効率化が、利用者の気持ちを「図書館は好奇心や知る喜びが詰まった場所」から「無料で本を手にできる便利な場所」へと変えてしまったのかもしれません。だからきっと、「ひまわり号」のメロディーを騒音と感じるようになったのかもしれません。

反面、これからは便利さと引き換えに個人情報やネットに繋がった予約により個人趣向の漏出などのリスクが考えられます。情報の蓄積化を避けるため、貸出カードは何年か毎に定期更新される必要が生じることでしょう。

かねてから思っていることがあります。図書館はもっと「日野の図書館」についてアピールすればいいと。

例えば、図書貸出カード更新の必要が現実となったら、運転免許証更新の際に必ず運転講習会を受講するように、更新時には「日野図書館利用講習会」を受講してもらい、日野の図書館の歴史や仕組み、利用方法、今の問題点、お願い、などをする機会を設けるのです。便利だけではなく、誇りと自慢と一緒に利用できる図書館でいてくれるように……。お願いです。